

ほうしょう鍼灸治療院

しんきゅうカレッジ

鍼灸師の成長・維持・継続・継承のための構想

ほうしょう鍼灸治療院

2025/11/21

注意 本テキストは転載や複製を禁止し、個人使用のみに制限します。

第一章 理念と目的

一. 基本理念

本構想の根幹は「医の道を生きる」ことにある。

医道とは、医術の技を磨くだけでなく、自分自身の人としての在り方を磨く生き方の道である。

鍼灸師は病を治すだけの存在ではなく、患者の社会復帰ということを考えた場合、身体・心・社会のつながりを整える存在とも言え、その実践には、知・技・徳・修のすべてが不可欠であると考える。

この理念のもとに本構想は、鍼灸師が「自己の成長」と「社会への貢献」を両立させる仕組みを考え、構築し、実行すること、つまり、鍼灸師一人ひとりが己を練り、他者を導き、社会と調和するという、循環的成長を目指すことが理念実現への道と考える。

二. 目的

1. 学びの体系化

鍼灸師が独学に頼らず、体系的・段階的に学びを深められる環境を整備する。

2. 成長の可視化

段階ごとの認定制度を設け、学びと成長を具体的に実感できる仕組みを作る。

3. 共同体の形成

個人事業主として孤立しがちな鍼灸師が、互いに支え合い、学びを共有できる場をつくる。

4. 文化的継承

鍼灸を単なる施術業ではなく、「医道」として文化的に継承する。

5. 社会的信頼の回復

知識・技術・倫理・経営・修養の五領域を兼ね備えた鍼灸師を育成し、社会に信頼される医療人としての地位を確立する。

三. 構想の方向性

この構想は、流派や思想の統一を目指すものではなく、多様な学びと実践が共に存在できる「私塾的連携ネットワーク」の創設を意図している。

そこでは、各人が自らの志をもって学び、互いに導き合いながら成長していく。

その根底にある精神は、――

「同行二人、自利利他」

である。自らの成長のためとはいえ学びが深まれば深まるほど、孤独感が強くなるものである。しかし、決して一人では無く、同じ志の仲間がいる。そして、自分の学びを深めて自分のために知識や経験を積んでゆくことは、必ず自分のためだけではなく、人のためにもなる。また、人のために自らの知識や経験を他人に譲ることは、その人のためだけではなく、必ず自分のためになる。この姿勢こそ、医の道における誠であり、学びの原点であると考える。

第二章 構造と段階制度

一. 全体構造の理念

本構想は、鍼灸師の学びを「共学（勉強会）」と「師事（個人指導）」の二重構造によって成り立たせようと考えている。

前者は広く門戸を開いた学びの場＝共同体であり、後者は少人数で深く学ぶ求道（＝探究）の場としての私塾的な空間である。

この二つを並行して運営することで、個々の鍼灸師が「学びたい深さ」に応じて自然に居場所を見出せる構造を目指している。

勉強会は、基礎知識・基礎技術・倫理・経営など、臨床に必要な土台を体系的に学ぶ場である。

一方、個人指導は、上級者や助講・講師が個別に指導を仰ぎ、臨床・研究・修養を深化させる場とする。いずれも上下の階層ではなく、それぞれの段階が目的や内容に応じてゆるやかにつながる仕組みとして設計している。

二. 段階制度の概要

学びの体系は、初級・中級・上級・助講・講師の五段階を設定している。昇級は本人の希望を尊重し、強制的な昇級は行わない。中級の次は、「マスターコース」の上級へ進む道と、「インストラクターコース」の助講・講師へ進む道がある。（各段階における認定、および、履修度を確認するためのテストなど、今後の運用に応じて、準備、実行する予定）

特に初級・中級は「基礎を学びたい人が安心して学べる場」として設計し、上級は「より深化した学びの場」として個人指導も受けすることが可能となり、助講・講師は「道を歩むもの」として、学習の深化、修養の教授が希望できるが、併せて、会の運営や教育にも参画する。

【段階制度表】

段階	主な内容	権利	責任	評価・進級
初級	基礎理論①、基礎技術、基礎倫理①	勉強会への参加	費用支払	修了で中級へ進級可（希望制）
中級	基礎理論②、応用技術、基礎倫理②、治療院経営①、OJT 基礎①	勉強会への参加	費用支払	修了で上級または助講へ進級可（希望制）
上級	応用理論、深化流派、カンファレンス、治療院経営②、OJT 基礎②	個人指導への参加可	後輩の見守り	研究・深化内容の発表（希望制）
助講	深化流派、カンファレンス、治療院経営②、OJT 基礎②、講師助手、修養伝授	講習費免除・個人指導への参加可・運営参画	会運営の補助	評価方法（筆記・実技・期間）は検討中
講師	カリキュラム設計・指導・評価・理念伝達、勉強会運営、外部研究・他団体交流・共同発表など	教義・講義内容の決定	会運営と教育品質の保持	今後、顧問・師範制度などの導入を検討

三. 勉強会と個人指導の関係

初級・中級では、学校のような講義形式を基本とし、基礎的な内容の理解と基礎技術の習得を重視する。

上級・助講では、カンファレンス形式の勉強会に加え、希望者は個人指導を選択できる。

この個人指導は、形式としては師事や弟子入りに近いが、その本質は、共に学ぶ姿勢、つまり「学びの

伴走」であり、上下関係ではなく、互いの成長を支え合う関係として位置づけたい。

【個人指導 一覧】

指導者	主な内容	開講日	開催場所	費用	備考
○○先生	無分流打鍼術	勉強会と同日	勉強会と同会場	なし	勉強会後に開講
△△先生	董氏奇穴ほか	隔月第四日曜	△△治療院	2000 円/回	
◆◆先生	醒腦開竅針刺法 人体惑星試論	毎月第一日曜	◆◆治療院	5000 円/回	

四. 評価と認定の仕組み

助講への進級、および、その後の評価方法（筆記・実技・期間など）は現在検討中とし、実施形態は今後の試行により定める。評価は良否を決めるために行うのではなく、学習者本人が自分の歩みを自覚・自己評価するための確認の場として位置づける。

各段階の節目ごとに賞状や記念品などの「象徴（シンボル）」を授与することを検討している。——それは、資格や地位の証としてだけではなく、学びの段階や志の深まりを表し象徴する「証（あかし）」として授与するものとしたい。この儀礼的な行為が、学びを単なる知識習得ではなく、医道への取り組みが修養へと繋がっている確認と手助けになるとを考えている。

五. 構造の特色

本構想の段階制度は、

- ・「希望進級制」により、強制ではなく自発的成長を促す。
- ・中級の次のステップは、学ぶ目的によって上級へ進む道と、助講・講師へ進む道を選べる。
- ・「象徴の授与」により、学習到達度の確認、修養レベルの認識が実感できる。
- ・「二重構造（勉強会+個人指導）」により、広さと深さを両立できる。

という四つの特徴をもつ。

これにより、鍼灸師一人ひとりが自分のペースで学び、同時に他者の成長を支える共同体としての循環を形づくりができると考える。

六. まとめ

この制度は、単なる教育体系ではなく、鍼灸師が生涯にわたって学び、教え、共に生きるために枠組みになりえると考えている。

一人の成長が他者の成長を促し、学びが文化として続くために、制度と理念を両立させることが、この章で示した構造の本質である。

第三章 経済モデル（標準形）※省略

第四章 教育内容と魅力

一. 医学 — 知を深める

医学の学びは、鍼灸師が「身体をどう見るか」という世界観を形づくる根幹である。本会では東洋医学と現代医学を対立させず、相補的な体系として統合的に学ぶ。

東洋医学では臓腑理論と經絡理論の角度から身体の内的・外的秩序を理解し、現代医学では解剖学・生理学・運動学から構造と機能を把握する。

- ・初級：臓腑経絡論（拔粹）、解剖生理学（拔粹）（基礎臨床体系を実践できるための理論）
- ・中級：中医基礎理論、中医診断学、經絡論、腧穴論、機能解剖学、運動学
- ・上級：研究・比較・翻訳（伝統医学と現代医学の同時解釈、常見症状の各理論的解釈）

学ぶ魅力は、単なる知識の習得ではなく、異なる体系の中にある「人間理解の多様性」を体感できることである。

二. 医術 — 技を磨く

医術とは、①医を行うために必要な身体技術、②理論を治療に転化するための臨床体系、である。

刺針・施灸・取穴・診察・診断など、すべての技は身体の言葉を読み解き、快方へ導くための方法である。

- ・初級：基礎身体操作、刺針施灸基礎、診察技術基礎、基礎臨床体系（基礎三体系弁証）
- ・中級：応用刺針施灸（手技を含む）、応用診察技術、三体系治療（弁病と大極・經絡・臓腑の併用）
- ・上級：独自研究、体系深化、技法の創出、カンファレンス
- ・助講：深化流派、カンファレンス

学びの魅力は、身に付けた技術と深めた知識が、臨床の中で医術へと昇華していく実感にある。

ここでの学びは、「手を動かすこと」に最も重きを置き、臨床を通じて知識が「生きた理」として体に刻まれていく過程である。

三. 医徳 — 心を養う

医徳は、すべての学びの基盤であり、医療人としての「人としての芯」を育てる領域である。

知識や技術があっても、患者への敬意・言葉の選び方・秘密を守る姿勢がなければ医療は成立しない。

倫理は規則ではなく、「生命に向き合う姿勢」として養われる。

- ・初級：態度・挨拶・患者対応、守秘義務の理解
- ・中級：倫理的判断、信頼関係形成、症例共有の扱い方
- ・上級・助講：後進の見守り、倫理観の伝達、自他への責任

ここで育つ魅力は、技術では得られない「信頼の重さ」と「心の静けさ」である。

それは「尽人事以聽天命」を日常に落とし込む修行でもある。

四. 医業 — 生計を立てる

医業とは、「志を継ぐために生活を成り立たせる力」である。本会では経営を利益追求としてではなく、理念を持続させる社会的行為と捉える。

税務や広報、価格設定、後方連携などの知識を学び、治療を続けられる環境を自ら設計する。

- ・中級：治療院経営の基礎（会計、税務、価格設定、集客）
- ・上級・助講：経営戦略、組織運営、後方連携、社会発信
- ・講師：教育活動・出版・共助基金の管理

ここでの学びの魅力は、「医療を続けられる自由」を得ることである。医業とは、金銭を扱いながらも、そこに「志金」つまり、「志を共有する人々の間で、理念を実現するために流れるお金」の意味を見出す実践である。

五. 修養 — 道を生きる

修養は、医を超えて「己を磨く」学びである。

易学・占い・道徳・食事・武術・瞑想・道教などを通じて、心と体と志を整える修行的な道を歩む。

それは信仰ではなく、医道者が己を正し、成長するための文化的実践である。

- ・助講：易学（占験）・操動（武術）・静座（瞑想）・符呪祈祷の基礎理解、志の継承、修性の理解と実践
- ・講師：思想の整理、継承法の検討確立、象徴的儀礼の伝達

この領域の魅力は、学びが「生き方」と一致する瞬間にある。修養によって、知・技・徳・業が統合され、医が「道」となる。

六. 一般常識 — 社会に立つ

医療人である前に、一人の社会人であること。挨拶、言葉遣い、清掃、金銭管理、文章表現、報告・連絡・相談など、一般企業ではOJTで学ぶ内容を、医療の現場に適用する。

- ・中級：言葉遣い・礼節・電話対応・報連相・金銭感覚
- ・上級と助講：チーム内でのコミュニケーション、説明力・記録力
- ・講師：後進指導、文書監修、組織的発信

ここでの魅力は、「常識」を磨くことで専門性が社会とつながること。

「一言の丁寧さ」「一枚の報告書」が、治療と同じだけ人を癒す力を持つ。

七. 個人指導 — 伝統をつなぐ

大勢で同一の内容を学ぶ勉強会方式とは異なり、各個人が学びたい先生のところで学習させてもらう。勉強会とは異なり、各先生によって考え方や大事にしていることが違うので、単純にその先生の得意としている治療体系や専門治療だけを学ぶわけでは無く、人として、治療家として、学べるものは何でも学び、また、教えてもらう一方ではなく、一定水準に達したら、その先生と一緒に臨床家として切磋琢磨することを重視する。

- ・上級と助講：専門知識、専門技術、思想、習慣
- ・講師：後進指導

ここでの魅力は、何と言っても各先生が大事にしてきた思想や治療を学ぶことにこそ、最大の価値がある。とはいっても、人間である以上、まったく同じ価値観ということは無く、違和感を感じる部分もあるだろう。その違和感こそが、自分自身を見つめ直し、今まで培ってきた知識・経験・思想を土台にした、自分流の臨床体系を作る大きなきっかけと成り得るだろう。

第五章 社会的価値と展望

一. 社会的意義 — 医療の外縁から文化をつなぐ

本構想は、鍼灸師が「個としての成長」と「社会への貢献」を両立させるための体系である。

鍼灸は国家資格制度において医療の一翼を担うと位置づけられているが、実際には医療制度の中心的枠組みからは外れ、臨床教育・連携体制においても十分に統合されていない。

したがって、鍼灸の使命は「制度に組み込まれること」ではなく、日本における現行制度下において、

医療の外縁から社会と医療を橋渡しする文化的実践を再構築することにあると考える。

鍼灸師が専門職として成熟してゆく過程で、地域医療・福祉・教育などへ関わる素地を育むこと。それは資格を得た瞬間に備わるものではなく、学びと臨床の積み重ねによって到達する姿勢であろう。この構想は、その成熟を段階的に支えるための道筋を提示する。

また、現代社会には多様な健康観が存在するが、それに応えるためにはまず「標準的な健康観」を理解する基礎が必要である。

本体系は、現代医学と伝統医学の双方を学び、多様性を尊重するための基準を理解する力を育てることを重視する。

鍼灸の社会的意義は、主流医療の補完でも対立でもなく、文化的パートナーとして人の「生」を支える一つの医療の形を示す点にある。

鍼を立て灸を据えることだけに留まらず、身体を通して人間を理解し、その理解を社会の健やかさへと還元していく——それがこの体系の出発点である。

そして、この構想で実践できるようになりたい医療は、治療技術と判断力を備えた上で、成り立つ寄り添う医療である。しかし、知識も経験も欠いたまま「心に寄り添う」と称することは、本来の医の在り方を損ねかねない。

まずは、治療する力を磨き、その後に自然と生まれる共感——

その順序を正しく保つことが、「医の誠実さ」を守る要であると考える。

二. 教育的意義 — 学びの共同体としての価値

本会の学びは、単なる技術研修ではなく、学び合う共同体として設計されている。

個人が知識を吸収する場としてだけではなく、知を共有し、経験を交換し、思索を深める場として存在する。

この教育体系の意義は、指導と修養が同時に成立する構造にある。

教える者は学びを通じて自らを省み、学ぶ者はやがて教える立場へと成長していく。その循環の中で、鍼灸師一人ひとりが「医道を生きる実践者」として成熟していく。

また、共に学ぶことで「孤立しない専門家」を育むことも、この体系の重要な目的の一つである。

独立開業が主流の鍼灸師にとって、学びの共同体は孤独な臨床を支える精神的基盤となり、同時に、次の世代を育てるための土壌ともなるだろう。

ここに、教育のもう一つの価値——「学びの文化を継ぐ」という教育の原点があるのではないだろうか。

三. 文化的意義 — 医道としての継承

鍼灸は医学であると同時に、東アジアに連綿と続く文化的実践でもある。

古典医書に見られる「天人合一」「陰陽五行」「以神制形」の思想は、身体を単なる生物学的存在ではなく、宇宙的秩序の中に生きる生命として捉える独自の世界観を示す。

この構想が文化的に持つ意義は、こうした思想を現代の鍼灸師が臨床と生活の中に生かすことによって実現されてゆく。

学問としての伝承だけではなく、日々の施術・修養・言葉・所作を通じて文化を再現し、その体現を通して「医の道」として文化をつなぐ。

伝統を守るとは、過去を模倣することではない。

伝統とは、その時代ごとに最先端であり続ける生きた継承である。その意味で、現代の鍼灸師は、伝統を再構築するだけではなく、時代に即して更新し続ける「進化的継承者」としての責任を担う。

これが「文化的医療」としての鍼灸の本質ではないだろうか。

四. 未来への展望 — 自立と共創の医療へ

本会の最終的な目標は、鍼灸師が自立した専門家として社会と共に創する未来を形づくることである。

それは医療機関との競合ではなく、相互補完的な協働であり、自らの専門性を保ちながら、他の職種と連携する医療の形である。

将来的には、

- ・学会、教育機関、地域医療との連携強化
 - ・研修、カンファレンスの社会発信
 - ・若手鍼灸師が学びながら生計を立てられる仕組みの整備
- を柱とし、持続可能な教育と臨床の循環を築く。

また、学びの成果を「知の共有財」として公開し、研究・出版・映像などを通じて社会に伝える。

これにより、鍼灸がもつ可能性を広く社会に提示し、次世代が希望を持ってこの道に入ることを促す。

未来の鍼灸師は、単に伝統を守る人ではない。

伝統を最先端として更新し、社会に役立てる創造者である。その創造は、過去を超える革新ではなく、過去を踏まえたうえで現在を照らす「現代の灯」としての継承である。

五. 結語 — 医道、再び人に根ざす道へ

この構想は、単なる教育モデルではなく、「医を学ぶことが生きることになる」ための仕組みである。

鍼灸という伝統医術を現代に生かすために必要なのは、制度でも経済でもなく、人が成長し続ける場の再創造なのではないだろうか。

知を磨き、技を高め、徳を積み、業を立て、修を深め、常識を携える。

その六つの学びが社会の中で静かに息づくとき、鍼灸は更に「人に根ざす医療」としての光を放つので

はないだろうか。

本会が目指すのは、学びを通じて人をつくり、その人が社会を温め、人生を豊かにすること。それが「見自己・見天地・見衆生」の実践であり、医道が再び人の道となる未来への第一歩であると考える。